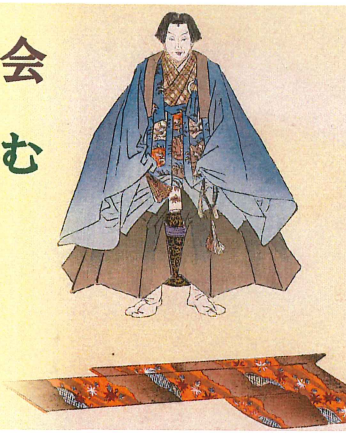


第十九回酒都で聴く居囃子の会
会話の妙と芸尽くしの囃子を愉しむ

「自然居士」

2024年11月10日（日）



古くから芸能と縁の深い酒都・西宮の造り酒屋において、地元在住の能楽師による謡と囃子で、能特有の音楽性と言葉の美しさを楽しむ「居囃子の会」。今回は、劇的な展開に思わず引き込まれる観阿弥の傑作「自然居士」を取り上げました。



シテ（出家） 善竹隆平 アド（施主） 善竹隆司



第一部の冒頭は大蔵流狂言「魚説経」で幕を開けます。もと漁師のにわか出家による魚介類の名前尽くしの説経が見どころの狂言です。



旭堂小南陵



謡 上田拓司 上田宜照 小鼓 久田陽春子

続いて、説経節の中でも特に著名で、中世の“人買い”の様子も語られる「山椒太夫」を題材に、自然居士が活躍した時代背景について講談でお聴きいただき、曲の理解につなげました。第一部の最後は、やはり「芸尽くし」を見どころとする「放下僧」から、当時の俗謡の趣向を取り入れた「小歌」の部分を謡と小鼓でお聴きいただきました。



休憩をはさんで第二部は、いよいよ本編の番噺子「自然居士」です。この物語の主人公である自然居士の説法は、庶民にもわかりやすい解説とパフォーマンスで知られ、おまけに美男子とくれば、彼が登壇する説法会はいつもファンで超満員でした。同時に七日の説法が満願になるのを打ち捨てて一人の少女を救うことを大事する、胸をすくようなヒューマニストです。そしてその態度はただひたすらにひたむきで、いかに脅されようと一歩も引かず、我が身に代えても少女を助けようと懸命に挑んでゆきます。その居士が、人買いになぶられると知りつつ、当時巷で流行していた様々な芸を繰り広げます。是が非でも少女を助けなければならない、この舞はそのための「狂言綺語」なのだという、居士の強い意志が感じられます。目的のためには如何に辱められようと平然と耐えてみせ、最後には初志貫徹する自然居士。観阿弥は、いわば「正義の味方」「我らのスーパーヒーロー」といった人物を舞台に活躍させたのではないのでしょうか。世阿弥が幽玄の能を完成させる以前、いかにも能がまだ大衆の中に生きていた時代の作品であり、おそらく当時の観客は、この大団円を拍手をもって迎えたことでしょう。当日の観客の皆様もおそらく同じような気持ちでお聴きいただいたのではないかと思います。

後半の聴きどころ、「芸尽くし」の場面ですが、人買いの求めに応じ、最初にいよいよ舞い始めたのが、早からず遅からずというテンポで舞う中之舞ですが、続く船の起こりの故事を語りながら舞う「舟の曲舞」、鰯の起こりを物語る「鰯の段」、「鞆鼓」と芸を披露してゆくうちに、居士自身、はじめは乗り気でなったのが次第に興にのってきているような様子がおのずと伝わってくるような気がしました。これも身近で聴く噺子の魅力なのかもしれません。

シテ（自然居士）	梅若基徳	地謡	上田拓司	笛	貞光智宣
ワキ（人商人）	寺澤幸祐	地謡	上田宜照	小鼓	久田舜一郎
ワキツレ（人商人同輩）	上田顕崇	地謡	上田顕崇	大鼓	大村滋二
アイ（雲居寺門前の者）	善竹隆司				